「随筆を書く」でなにをねらうか

お茶の水女子大学附属小学校
阿部　藤子

指導要領に言語活動例が示されて以来、自分が指導することになったらどう指導するのだろう、と思うことがいくつもあった。中学校では「随筆」として教材がありそれを読む学習は行われるが、そもそも小学校では、「随筆」を読む学習もない。それでいきなり書けというのは、どうしたものか、と単純に思ったのである。

昨年度六年生を担任し、実践する機会を得たので、その一端を紹介し、この言語活動について一考したい。

一　随筆とはどういう文種かを知る

23年版の各社の国語教科書にある「随筆」の例文から、随筆とはどのようなものかを子どもたちがつかめそうなものを取り上げ紹介した。そのほか、いくつかの作家のエッセイも紹介した。子どもたちは、日頃のこと、昔に遡って思ったことを書こう、自分たちが書く作文とほとんど変わらない、と気づく。しかし、いわゆる生活作文と同じだろうか。「随筆を書く」と言うからには、どこかに違いがあるはずであり、それがこの言語活動のねらいにもなるはずである。

その違いは何か。三省堂『小学生の国語』六年に「自由な発想で―随筆―」という教材がある。ここでは、日頃の経験の中で、事実を書き、それについて自分の思いや考えを書くようにという記述がある。簡単に言えば、経験をもとに自分が思索したことを綴るのが随筆だ。この「思索」がポイントになる。

二　学習指導計画（全8時間）

①随筆を読み、随筆の特徴を知る。（1時間）
②題材を選び構想を立てる。（2時間）
③構想メモを元に質問し合い、異なる見方、感じ方を得る。（1時間）
④随筆を書く。（2時間）
⑤作品を読み合い、随筆集を作る。（2時間）

何週間かかけて、なるべくたくさんの随筆に触れさせた。それと並行して、題材集めのために、随筆メモを書きためていく時間を授業の中でほんの五、六分ずつ取るようにした。「卒業を前に」「忘れられないこんなこと」「わたしのこだわり」など、こちらがテーマを提示して書かせたこともあった。

題材集めの後、選材をし、随筆に書く題材を決め、エピソードと自分の思いや気づきを構成表にメモして記述の準備をした。

三　異なる見方・感じ方に気づく

しかし、私は、子どもたちにもう一歩高級な随筆にするためにもうひとひねりしようと、学習活動③で、新聞の投書欄から探し出した文章を子どもたちに与えた。（平成23年2月12日　朝日新聞「若い世代」欄）

> 私は、人に笑顔になってもらえる接客の仕事に就きたいという願いをもって就職活動をしている。人のために何かするには「人の立場に立って考える心」が不可欠だ。
>
> 先日、駅のホームですれ違った女性がぶつかってきて、「あっ」と思った瞬間

には手に持っていたタンブラーが落ち、中のお茶がすべてこぼれてしまった。謝罪もそこそこに電車に乗り込んだ女性に対しての思いを思わず母にメールでぶつけた。

ここまでが投書の前半である。ここまでを子どもたちに示し、母からの返信を予想させた。

一番多かったのは、娘に同情して「全く災難だったわね」という類のもの。娘を慰めるのもこの部類である。次に、「気にしないことよ」のようにあくまで娘を受容しつつアドバイスするタイプ。娘以上に腹を立て「全くけしからん人ね」という感情共有タイプも。しかし、投書に載っていた母親の反応はこのいずれにも属さないものだった。

母の返信は予想外なもので

「あら……他の方にかからなかった？」

と一言。

これを見て私は自分のことしか考えていなかったことを思い知らされた。母のように他人を気遣う余裕が私にはなかったのだ。

一年後には社会に出るのに、まだまだの私。でも、このことをきっかけに、たくさんの思いやりの気持ちをもてるようになり、常に人を思える母のような女性になりたい、と改めて強く思った。

（二十一歳　大学生）

異なる見方、感じ方とはこういうものだと、子どもたちは実感したようである。

ただ、自分だけで異なる見方や気づきができるというのは大人でも難しい。従って、随筆を書くにあたっては、構想段階で友達同士でメモを紹介し合い、読者として友達がどんな見方、感じ方をするかを聞き、交流し合う時間を設けた。

H子は、中学生になると電車バスなどで大人料金になることについて書くことに決めた。そのメモには、ディズニーランドは中高生料金がある。そのように交通機関の料金もいきなり二倍の大人料金にしないで中高生料金を作れないかと考えたことを書こうとしていた。これについて、友達からは共感や違う考えが出された。

・博物館や美術館は中学生まで無料だ。それを考えるとなぜ中学生から大人料金になるのか。子ども料金の期間を長くしてほしい。

・大人料金って言ったって、何百円かの違いだし、大人に一歩近づくって感じがしてうれしいよ。

・体の大きさは大人に近いから、仕方ないんじゃないかな。

自分も「そうか、そうも考えられるか」と思えたら、自分の随筆に生かしてよいこととした。H子は、異なる見方、感じ方を他者から得て自分の考えを再構成するまではいかず、随筆本文に友達の考えを紹介する形にとどまった。が、小学生では、共同制作の形で考えを共有し合い、書き上げることも一つの方策と言えるだろう。

四　むすび

「随筆を書く」はいわゆる「書く」領域の言語活動である。が、書く力とともに、異なる見方、感じ方を耕す、つまり思考の幅を広げる学習だと感じた。

六年生では、卒業文集の執筆があり、さまざまな文種で卒業文集に取り組むきっかけにもなるであろう。

あべ　ふじこ　23年版の新しい教科書、教材でどんな学習が展開できるか、日々、実践を重ねています。